アーチルニュース　ちぇなっぷ

発行元：仙台市発達相談支援センター　〒981-3133 住所 仙台市泉区泉中央２丁目 24－1
TEL：022-375-0110 Fax:022-375-0142　e-mail:fuk005410@city.sendai.jp
http://www.city.sendai.jp/kenkou/hattatsu/gaiyou

紡ぎあいのアイル

アイルには障害児者のお母さん方の願いが込められています。その願いが実現するためには、アイルに込められた願いや考え方を多くの方々にご理解いただくことが必要だと考え、今回の「ちぇなっぷ」でご紹介させていただくことにいたしました。

アイルは平成 15 年から障害児者のお母さん方が中心となり、基本的なことから議論を重ねて創り上げ、平成 17 年度から少しずつ活用を図っています。その後、情報ファイルの部分だけがアッという間に全国に広がり海外にまで紹介されたところです。しかし、本来のアイルはケアマネジメントを生涯にわたって継続するための仕組みであって、情報ファイルはその中でこの仕組みを維持するための大切なパーツと位置づけられています。当事者と関係者をつなぐときにその姿を現すことから広く知られることになったと思いますが、アイル全体の理解があってこそ情報ファイル本来の力を発揮します。先ずアイルの全体像についてご理解いただいた上で、情報ファイルも含めてアイルをご活用いただきたいと考えております。

さて、アイルのはじめの一歩はご当事者と当センターの職員とでケアマネジメントのプロセスを踏み出すところからはじまりますが、その後はその時々に障害児者が所属する機関の主たる支援者の協力を得て歩み続けることを想定しています。それぞれの機関に対して何か新しいことをお願いするのではなく、既に取り組んでいる個別支援計画の策定においてアイルに紡がれた情報を活用していただくこと、個別支援計画策定の過程をアイルに紡いでいただくことの二つをお願いしたいと考えております。特に障害児の場合は成長とともに比較的短期で所属が変わり、同じ所属であっても主たる支援者（担任）が 1・2 年で変わります。所属や主たる支援者が変わる度にアセスメントを一からやり直すのでは大変な苦労が伴いますが、アイルに紡がれた情報を活用することで個別支援計画策定の苦労を軽減することができます。アイルは当事者だけでなく支援者にとっても優しい仕組みになっていると思います。

コツコツと紡がれたアイルは障害児が成長し親元から巣立つときに、これまで以上に大きな力を発揮します。アイルはお母さん方の願いや「自分の人生を自分らしく自分で決めて生きる。」ことをサポートする力をいっぱい蓄えて、その後の障害者の人生を支えてくれるはずです。お母さん方の願いが叶うことを祈りながら今回の「ちぇなっぷ」を皆様にお届けしたいと思います。

発達相談支援センター　所長　後　藤　敬　二

※ちぇなっぷは「CHIN UP・前を向いて」の意味です。

I will（I ill）アイル
私らしく生きる

「こんな人生を送りたい！」願いを紡ぐ「アイル」

アイルに込められたお母さんの願い

母親の持つ情報を最大限に役立たせ、
その時々に関わりを持つ人たちと良好な関係を作り、
自分の人生を自分らしく、自分で決めて、生きてほしい。

アイル作成委員　荒ひろみさんの声（保護者）

助けてほしい！

福祉事務所、相談機関、医療機関・・・どこにいっても、聞かれることは一緒。しかも、隣で子どもが「眠い」とぐずる。「助けてほしい」と思って訪ねたのに・・・。はじめはねがいというよりも怒りだった。

怒りがエネルギーに

5年前に同じ思いを持つ6人の保護者が集まり、自分たちが必要と思うものをつくろうと話し合いをはじめた。「親と支援者が一緒に考える基礎としたい」「出会った人々と顔が見える関係にしたい」「持つ人が主体となって持つことができるように」をイメージして具体化していった。

双方向で理解しあえるものに

障害児の母親は不平不満が多いといわれた。自分では文句を言っているつもりはなかったのに。今考えると、聞いてもらう人にわかってもらうやり方がある。それを具体的にしたのがアイル。支援者と双方向にやりとりしていくことが大事なのだ。

一生涯使えるものに

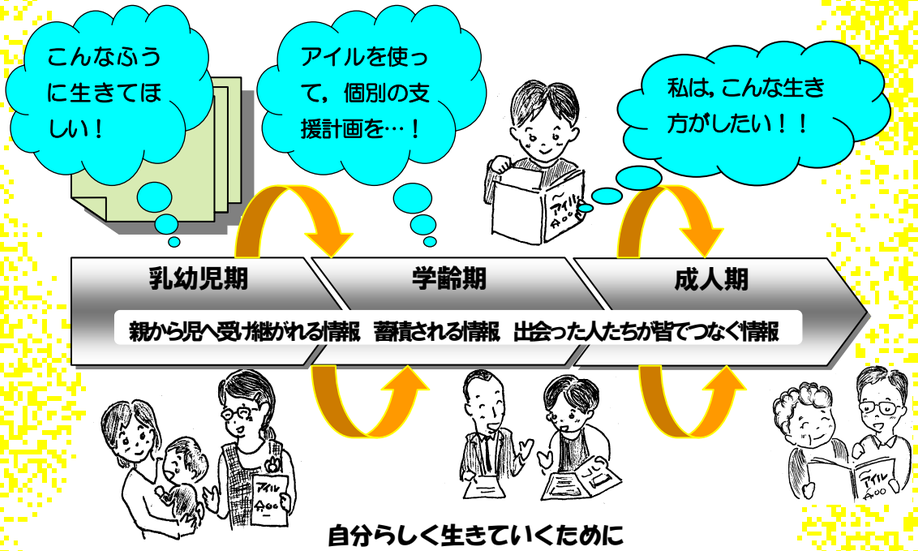
アイルを使ってそのときに関わった人たちと共通理解することが将来につながる。そうすると、気持ちよく働いたり、家以外のところで楽しく過ごすなど、具体的な希望が見えてくる。

私がいなくなっても、我が子の情報を最大限に生かして

一生ずっと親と一緒、サポートしてくれる人と一緒というわけではない。親が亡くなった後でも、出かけるときにはアイルがあれば大丈夫、というものになるとよい。例えば、事故があったときに免許証を探すのと同じように、サポートが必要な人に何かあったとき「サポートブックないか」と声が出る社会になってほしいというのが私のねがい。

myサポートファイル「アイル」は、平成17年に全国に先駆けて誕生しました。障害児者のお母さんたちとアーチルが一緒に作ったものです。まわりに伝えたい情報や自分らしく生きるための行動計画など、アイルを通して紡がれる大切な情報は、かけがえのない人生の大切な記録となります。

今回は、アイル作成委員、アイルを活用した保護者を通して、アイルの意義について考えてみたいと思います。



アイルの紡ぎ手になってください
～ご本人・家族・支援者の方へのメッセージ～

1 ご本人へ
あなたの役に立つように、皆でアイルを紡いできました。これからは支援者の協力も得ながら、あなたの人生と共にアイルを紡いでください。

2 家族の方へ
お子さんが巣立った後も、自分の人生を歩み続けることができるよう、情報を重ねたり、新しくしたり、加えたりしてください。

3 支援者の方へ
ねがいの実現に向けて、アイルに紡がれている情報に新しい情報を加え、支援計画を作成してください。その過程をアイルに紡いで、次に関わる人たちにつないでください。

このように、アイルは本人のねがいを中心にした支援を途切れることなくつないでいくための仕組みであり、「障害のある本人と家族が様々な人たちと一緒に、自分を主人公とした物語を紡いでいくものだ」と私たちは考えています。

「我が子」の人生を『アイル』に紡ぐ

袋原小学校特別支援学級に在籍する4年生の女の子を紹介します。「地域に普通に住んで、普通に暮らしてほしい」―これは、相談でご両親がふと口にした言葉です。このねがいは、決して特別なものではなく、誰もが当たり前に願う「ねがい」です。

「我が子のねがい」を『アイル』に

娘さんが就学を目前にした頃のことです。お母さんは、これまで、保育園と二人三脚の子育てをしてきました。しかし「小学校でも保育園のようにお友だちと仲良くしたい。」という我が子の「ねがい」に気づいたとき、小学校にこの「ねがい」をうまく伝えることができるのか不安になりました。

『アイル』が家族と地域を変えていく

学校は、お母さんのねがいをしっかりと受け止め、アイルに紡がれた情報も活用して、受け入れの準備をしてくれました。しかも、その子の「ねがい」を地域の人に届ける機会も設けてくれました。こうして、学校も地域もアイルの紡ぎ手となってくれました。

アイルの活用を通して、本人の「ねがい」を届けたことで、本人を中心とした地域のつながりが波紋のように広がりました。

「私の元を巣立っていっても・・・」

両親の元を巣立った後も、アイルがあれば新たに出会う支援者に自分のことを自分で伝えられる。アイルがあれば支援者の協力を得ながら自分で決めることができる。そんな風に考えることができるようになりました。

大丈夫。

この子には『アイル』がある。

『アイル』を紡いでくれた支援者の手がある。

かけはし

「アーチル」とは「アーチ（arch：橋）」と「パル（pal：仲間）」とをかけたもので，センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め，市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は，読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう，皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思います。

学校の中でつながる！

「成長がゆっくりで心配」，「周りとの違いに気づき始めた子どもにどう接すればいいの？」，「学校で安心して過ごしてほしい」など，子どもの発達に悩みを抱えても，誰にも相談できずに孤立しがちなお母さんは少なくありません。そうしたお母さん同士がクラスや学年を越えて交流する取組みが各学校で少しずつ増えてきています。

市内のある小学校でも月１回のペースでお母さん同士の懇話会を行っています。２ 年前，「障害があってもなくても子育てに悩むお母さんは多いのでは？」と感じた小学校の特別支援教育コーディネーターがPTA 役員の皆さんに相談し，学校全体に声がけしたのが始まりです。アーチルも「子育て懇話会」の企画に加わり，学習会などに参加してきました。

回を重ねる中で「交流を続けたい」との声が上がり，現在では，障害のあるなしにかかわらず，お母さん同士が自主的に集まり，子育ての悩みを聞き合ったり知恵を出し合ったりするようになっています。

お母さん同士がつながりお互い元気になれる場が，「学校」という身近なところにも作られていく・・・アーチルはそうした取組みを応援していきたいと考えています。

平成２１年度
発達支援フォーラムを開催しました！

平成 22 年１月 10 日に青年文化センターにて「自分の人生の主人公として生きるとは」をテーマに発達支援フォーラムを開催しました。今回は講師として，さわやか福祉財団理事長の堀田 力氏を招きました。堀田氏からは，高齢の方の暮らしの視点も織り交ぜながら，助け合う共助の感覚を大切にする教育のあり方や，障害のある方はそれぞれ違うものを持ちながら「普通に生きたい」と思っているので，支援するだけではなく，地域で普通に受け入れ，認め合うことが大切といったお話がありました。第二部では，地域をキーワードに仙台の教育関係者，地域づくりを実践している方，保護者の方による対談が行われ，「地域で誰もが主人公」をテーマに障害のある方や家族が安心して暮らせる地域とは？地域はどんな力を持っているのだろうか？などについてそれぞれの思いを語っていただきました。

編集後記

我が子への夢を抱き，我が子の障害に悩み，家族を想うたくさんのお母さんたちにいつも出会わせてもらっています。私たち職員が１人だけでできることはあまりないかもしれませんが，地域の方々ともつながりながら，アイルを一緒に紡いでいきたいと思っています。　（地域ケア係：木村映理子）